

教師の自己教育力に関する調査研究

—成長の契機についての自己形成史的分析—

小山悦司*・河野昌晴**・村島義彦*
曾我雅比兒**・妹尾純子***

*岡山理科大学教養部

**岡山理科大学理学部

***加計学園研修室

(1989年9月30日 受理)

1 はじめに

近年、自己教育力の育成が、我が国の教育界における緊要な今日的課題として注目されており、比較的豊富な研究成果が着実に蓄積されてきている。ところが、子どもの自己教育力の育成に直接携わるところの教師の自己教育力については、教職という職務の性格上教師が自己教育力を有することは自明のことと考えられ、その具体的な内実などについては、ほとんど論及されてこなかった。無論これまでも間接的には教師の動機づけやモラール研究等を中心にさまざまな分野からアプローチがなされてきたが、それも、直接的に教師の自己教育力に焦点を当てたものではなかったといえよう。

しかしながら、昨今の教職の専門職性論議の高まりや教師の資質向上が叫ばれる中で、教師の自己教育力がかつてないほど強調されていることは周知のとおりである。しかも子どものモデルとして、自己教育力を持つ教師あるいは自己教育力を自ら開発しようと努める教師が求められていることから、教師の自己教育力に力点を置かざるを得ない状況に至っている。

筆者らはこれまでに、教師の自己教育力に着目し、若干の論稿を通して考察を加えてきた。そのひとつは、上述の自己教育力が発現されるための母体となるところの、自己教育そのものの概念や内実の検討を試みた前稿¹⁾である。前稿によれば、自己教育とは、ある価値や目標に向かって、自己の内部で葛藤を繰り返しながら自分自身を高めようとコントロールしていくといった、教師自身の生き方に直接かかわる概念であるといえる。この前稿に対して、今後なお繰り返し吟味を要する課題は、教師の自己教育に対する「構え(set)」が確立される過程をより一層明確にしなければならないことである。すなわち、人間の精神内面における自己成長への動因的力量にみられる特性とか、それが形成されるメカニズムの一端を明らかにするために、教師個々人の自己形成史を綿密に分析する中でその共通性を導出するなど将来の研究が待たれるのである。そこで、本研究では、面接調査や質問

紙調査を実施することによって、個々の教師のアクション・リサーチ的な資料を蓄積し分析することを目的としている。なぜならば、こうした資料の分析こそ、自己教育力を高めるための援助方策を検討する際に不可欠な基礎的作業であると考えからである。

2 調査の概要

調査は、現職の教師を対象にして、①自己教育力の内実を構造的に把握すること、②自己教育力の高低にかかわる要因を分析すること、③成長の契機的一端を明らかにすること、の3点を主要な目的として2回に分けて実施した。

表1 調査の概要

1 次 調 査 (予 備 調 査)	
目 的	2次調査(本調査)の設問項目作成の基礎資料を得るため
対 象	本学理学部基礎理学科卒業生で現在教職に就いている者213名
方 法	郵送質問紙法(全員)および面接法(12名)
期 間	昭和63年11月から平成元年1月まで
回収率	有効回答者数76名, 有効回収率35.7%
内 容	①自己教育力が上昇, 下降した場合の事由 ②自己教育力が高い教師にみられる特徴 ③その他
2 次 調 査 (本 調 査)	
目 的	自己教育力の構造的把握, 自己教育力の高低にかかわる要因, および, 成長の契機的一端を明らかにする
対 象	本学卒業生で現在教職に就いている者1,302名
方 法	郵送質問紙法
期 間	昭和63年12月21日から平成元年1月11日まで
回収率	回答者数372名, 回収率28.6%, 有効回答者数361名, 有効回収率27.7%
内 容	①フェイス・シート(計11項目) ②自己教育力の自己診断(計56項目) ③自己教育力が上昇, 下降した場合の事由(自由記述) ④教職能力の自己診断(計15項目) ⑤成長の契機となった出来事とその時期(自由記述)

表2 フェイス・シート

		経 験 年 数								総 計	
		1 年 目		2 ~ 3 年		4 ~ 10 年		11 ~ 20 年			
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
	計	22	6.1	47	13.0	174	48.2	118	32.7	361	100.0
性 別	男	19	6.2	37	12.1	146	47.6	105	34.2	307	85.0
	女	3	5.6	10	18.5	28	51.9	13	24.1	54	15.0
年 齢	22~27歳	21	23.1	40	44.0	28	30.8	2	2.2	91	25.2
	28~32歳	0	0	6	4.6	121	93.1	3	2.3	130	36.0
	33~37歳	0	0	1	1.2	24	28.9	58	69.9	83	23.0
	38歳~	1	1.8	0	0	1	1.8	55	96.5	57	15.8
校 種	小	0	0	0	0	39	75.0	13	25.0	52	14.4
	中	10	5.5	27	14.9	79	43.6	65	35.9	181	50.1
	高	11	10.3	16	15.0	47	43.9	33	30.8	107	29.6
	そ の 他	1	4.8	4	19.0	9	42.9	7	33.3	21	5.8
担 当 教 科	数 学	7	5.1	25	18.2	64	46.7	41	29.9	137	38.0
	理 科	11	7.4	15	10.1	65	43.9	57	38.5	148	41.0
	そ の 他	4	6.0	7	10.4	38	56.7	18	26.9	67	18.6
	無 回 答	0	0	0	0	7	77.8	2	22.2	9	2.5

すなわち、表1に示すように1次調査（予備調査）では、郵送質問紙法と面接法を用いて、2次調査（本調査）の設問項目を作成するための基礎資料を収集した。そして、2次調査では、上述の3点を明らかにするために郵送質問紙法によって調査を実施した。有効回答者のフェイス・シートを示すと表2のようになる。

3 分析の視点

本稿は、教師が教職生涯を通じて成長を遂げる際の契機、およびその経年的変化にみられる特徴の一端を明らかにすることを目的としている。すなわち、「教師はいつどのような契機によって成長を遂げるのか」といった課題意識に基づいて、2次調査の「⑤成長の契機となった出来事とその時期」に焦点を限定している。ここでは、自由記述によって得られた成長の契機となった出来事を、まず頻度の高い順にカテゴリーに分類し、つぎに大学時代から現在に至るまでのライフ・コース上にみられる特徴について自己形成史分析的な考察を試みたい。

そこで、まずこの分野に関連した先行研究との対比によって今回の調査の意義ないしは独自性を明確にしておきたい。これまでの先行研究の成果を整理すれば、教師を成長させる主要な規定因は概ねつぎのように要約される。すなわち、教師が職能成長を遂げる過程

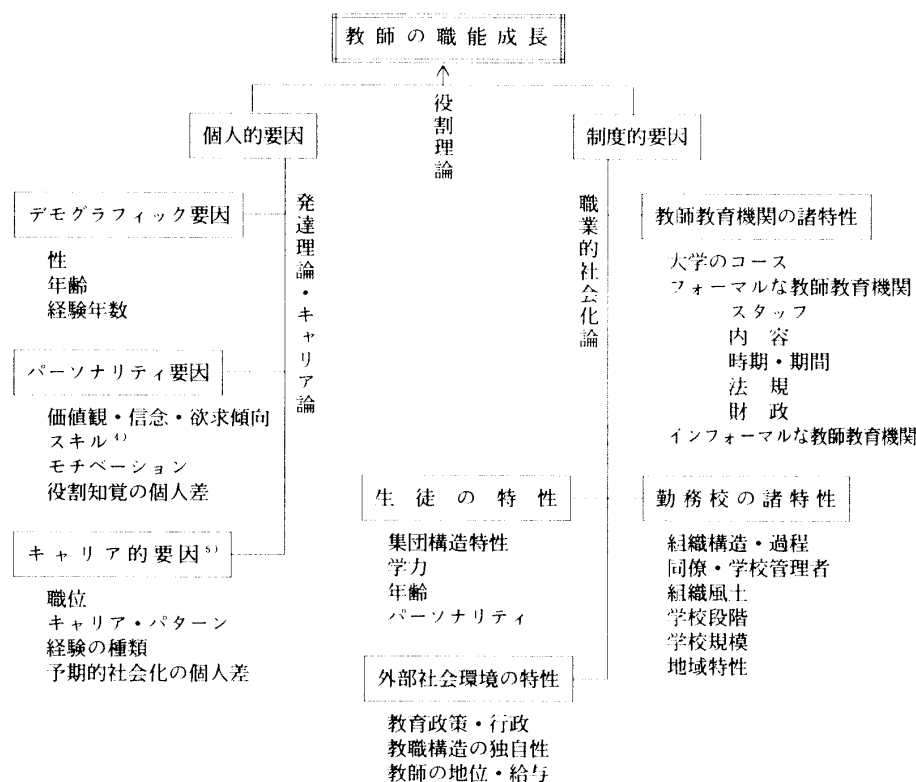


図1 教師の成長規定因とその理論的背景

に着目した諸研究を、Brottman, M. A. の分析枠組²⁾を用いて図式化すれば、図1に示すように様々な成長規定因が含まれる³⁾。

さらに、先述の規定因の中でも、例えば役割期待者（役割規定因）の推移をみれば、表3に示すように、学生生活から教職生活を通じて、①恩師、②学部の諸要素・諸特性、③教育実習校の担当教師、④教室における児童生徒との相互作用、⑥同僚教師、⑦勤務校の特性、⑧職責（職位）と成長規定因が推移している。

表3 役割期待者等の推移⁶⁾

成長段階	役割	役割期待者	役割規定因
養成教育以前			恩師を観察しての教師像の形成
↓ 選択	児童生徒との関わりよりも教科内容や理論の習得	1. 大学管理者 2. 教授スタッフ	学部の諸要素・諸特性
学 生 「プロフェッショナル・グロースの開始」	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 生徒との関係を実体験によって習得 ◦ 実習担当教師への従属的対応 ◦ 教授技能の展開 ◦ 他教師との協力 	1. 現場の実習担当教師 2. 大学の教授スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 教室における児童生徒との相互作用 ◦ 教育実習校のプログラム ◦ 期待の成功的内在化 (successful internalization)
↓ 免許			
就 職 前 「理論と実践の葛藤」	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 担当クラスに対する責任の遂行 ◦ 「学習指導者」 ◦ 「文化の媒介者」 	同僚教師 学校管理者 児童生徒 学年主任 父兄など	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 学校における職責 ◦ 就任校の特性
↓ 任命			
新 任 期 「教職観の変容」	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 新任期の役割の伸長と洗練 ◦ 学校運営や他の管理事項の遂行 ◦ 「地域との連絡者」 ◦ 「専門職の一員」 		
↓ 更新			
熟 達 期			

一方、我が国の最近の先行研究としてこの分野で注目されるのは、つぎの2つである。その1は、稲垣忠彦らの「ライフ・コース・リサーチにもとづく教師の力量形成」についての研究⁷⁾である。これは、長野県師範学校昭和6年卒業者を対象としたもので、質問紙（回答者数71名）と綿密な面接（36名）を行ったものであり、同年齢集団（cohort）としての教師が、およそ40年にわたる教職生活を回想して、自己の成長に変化を生み出したと回答した事柄をまとめたものである。その2は、木岡一明らの「教師の自己認識から見た職能成長過程と成長促進要因」についての研究⁸⁾である。これは、教師個人に焦点を置いて、事例調査法を用いることによって、同一学科の同じ研究室出身の教員歴10年未満の教師計7名を対象にして、教師自らが描いた自己像の分析を試みたものである。

両調査は、その手法においても、質問紙調査に加えて綿密な面接を導入するなど教師個々

人の自己形成史的な側面にアプローチを試みており、この点は従来の調査研究とは一線を画している。しかし、前者の調査から得られた知見は、師範学校時代をはじめ戦前・戦時下・敗戦直後などの時期に比重が置かれており、時代的に現代とは相当のギャップがみられる。また、後者の研究では、母集団（7名）が余りにも小さく、斬新な手法はそれなりに評価できて教師集団全体としての一般性には乏しいといえよう。そこで、我々はこのような両調査の限界を多少なりとも補うことを意図して、以下の諸点に留意しながら調査を企画した。

それは、自己形成史的な資料の量にウェイトを置いた点である。教師の成長過程を論じる際には、やはり最大公約数的で全般的な傾向を明らかにする必要がある。そこで我々は質問紙法の限界は認めつつも、母集団の大きさを重んじてあえて質問紙法を採用した。それは、つぎのような理由によって質問紙法の問題点を多少なりともカバーできると考えたからである。

- ①調査対象者は、同一大学同一学部の卒業生だけに同質性がみられる。そこで、この同質性を前提として、事前に面接（予備調査）を行うなどによって質問紙法の欠点のある程度補えるものと考えた。
- ②例えば無作為抽出法などは、どちらかといえば機械的で無機質なイメージが伴いがちであるが、今回の調査は本学の卒業生を対象としているだけに、母校との精神的なつながり（帰属意識）が根底に存在しており、かなり立ち入った内容まで掘り起こすことができるものと考えた。
- ③質問紙法を用いて人間内面まで踏み込むのは至難の技であることはいうまでもないが、過去の講義等を通じて調査対象者と面識のある本学教員に直筆のメッセージや電話を依頼したり、同窓会の全面的な援助を受けるなどして、可能な限りの対処を試みた。
- ④調査では、成長の契機についての具体的な記述内容を重視しており、その意味では自由記述の方法によってある程度対応できるものと考えた。

しかし一方、今回の調査ではつぎのような調査の限界を認めざるを得ない。すなわち、本学は昭和39年の創立であって、教職経験20年までの教師しか輩出していない。この年代層の教師は、教職生涯全体においていわば新任期と中堅期に相当するものであって、熟練期の教師が対象から欠落しているのである。

そこで、次節以降の考察はこのような限界を念頭に置きながら行うことにしたい。

さて、設問の内容は、「先生の過去を回想していただき、『あの時は、ひと回り成長したな。』と思われるような成長の契機となった出来事は、どのようなものだったでしょうか。」と尋ねたもので、重要度順に3つまで記入するよう求めた。その代表的な記述例を一括して末尾に掲載しているが、いずれも真摯な回答であり、それぞれ悪戦苦闘しながら生徒達と共に“学び”を続けている様子が生き生きと伝わってくる記述である。

4 考察

(1) 全体的考察

「成長の契機となった出来事とその時期」についての回答総数は759件であり、それらをカテゴリーに分ければ6つに分類され、さらにカテゴリーごとの傾向をみたものが表4である。最も回答数が多かったカテゴリーは、「②教育実践上の経験」(203件)であり、いわゆる「教師は子どもから学ぶ」といった内容を多く含んでいる。そして、「①大学時代等の経験」(167件)がこれに続いている。両者を合わせると全体の約半数に達し、これらとともに経験を成長の契機とするだけに、教師の成長にとってさまざまな経験の繰り返しが大きな意味をもつことが察知されよう。

表4 カテゴリー別回答数(上位3位)

N = 759

①大学時代等の経験	167	②教育実践上の経験	203	③人物からの影響	98
(a)部(クラブ)活動	47	(a)日常の生徒との接触	41	(a)先輩教師の助言や励まし	50
(b)教育実習	21	(b)問題生徒への対応	39	(b)職場の人間関係	25
(c)ゼミでの卒業研究	16	(c)部(クラブ)活動の指導	27	(c)同僚の影響	14
④研修活動	144	⑤職務上の役割の変化等	114	⑥個人および家庭生活	33
(a)研修活動(校内中心)	68	(a)重要な役割を任されて	40	(a)子女の誕生	9
(b)研修活動(校外中心)	36	(b)主任(主事等)を担当	24	(b)結婚	5
(c)研究論文・研究発表	22	(c)転勤によって	22	(c)社会人時代の経験	5

(2) ライフ・ステージ別考察

学生生活から教職生活に至るまでの過程(ライフ・コース)を、ここでは表5の左欄に示すように各段階(ライフ・ステージ)に区分した。教職生活を4段階に区分した理由は、内外の多くの先行研究で意味のある時期とされている新任1年目、3年目、10年目を指標として用いたからである。これは、いわば新任前期(1年目)、新任後期(2~3年目)、中堅前期(4~10年目)、中堅後期(11~20年目)とも呼べるものである。そこで、表5に基づいて各段階ごとにみられる特徴的な成長の契機について以下に考察してみよう。

[1] 大学時代

この時期に圧倒的多数を占めるのは、部(クラブ)活動によって人間関係を中心に多くのことを経験して成長したとするもので、例えば「少林寺拳法を4年間やり通し、根気強さや精神力を鍛練し、集団の中で自他の立場を考え調整する能力を養ったこと」(大学1~4年次)や「有志を募ってサークル活動を始め、リーダーとして運営や活動に力を注ぎ、集団をまとめる難しさを学んだこと」(大学2年次)などの記述がみられる。つぎに教育実習が多数を占め、実習担当教師から激励されながら本物の生徒達に接し、一方では「ゼミ

表5 成長の契機 — ライフ・ステージ別分別 —

時 期	主な内容(上位3項目)	回答数(%)	0	5	10	15	20	25	30	(%)
大学時代 N=167	① 部(クラブ)活動	47(28.1)								
	② 教育実習	21(12.6)								
	③ ゼミでの卒業研究	16(9.6)								
新任1年目 N=103	① 先輩からの助言や励まし	23(22.3)								
	② 日常の生徒との接触	10(9.7)								
	③ 非常勤(臨採)時代の経験	6(8.1)								
2~3年目 N=146	① 研修活動(校内中心)	23(15.8)								
	② 日常の生徒との接触	12(8.2)								
	③ 先輩からの助言や励まし	11(7.5)								
4~10年目 N=226	① 研修活動(校内中心)	28(12.4)								
	② 問題生徒への対応	18(8.0)								
	③ 重要な役割を任されて	16(7.1)								
11~20年目 N=52	① 重要な役割を任されて	11(21.2)								
	② 研修活動(校外中心)	7(13.5)								
	③ 主任(主事等)を担当して	7(13.5)								

注：()内の%は、各時期ごとに集計した数値を示す。

が大変厳しかったが、追及していく姿勢などゼミの先生に多くを学んだ」(大学4年次)など厳しいゼミで研究の姿勢など多くを学ぶとか生涯の友を得たなどの記述が続いている。

[2] 新任1年目(新任前期)

この時期は、多くの先行研究で指摘されている通り、“critical period” とか “trouble spot” とも称されており、「就職最初の年、初めての担任を持つなどして多くの問題を抱え、肉体的・精神的に疲れ果てる毎日だったが、先輩の先生方から『がんばれよ』と常に暖かい言葉をいただき激励された」(入職後1年)との記述にみられるように、教師として初めて教壇に立ち、途中でくじけそうになりながらも、先輩教師や生徒達の励ましによって、気を取り直して若さと情熱と体力でこのサバイバルの時期を乗り越えていくのである。また日常の生徒との接触が、自分自身を刺激し、非常勤(臨採)時代の様々な経験が新任1年目の成長を支えるものとなっている。

[3] 2～3年目（新任後期）

この時期は、「県指定の焦点授業を公開し、改めて『授業』という50分の流れの重要さや生徒の思考の変容について考え始めたこと」（入職後2年）や「2次関数（中3）の単元で公開授業を行った時、教具や予備実験など自分なりにあれこれ工夫し、それなりの成果をおさめたこと」（入職後3年）の記述にみられるように、研修活動（校内）を開始する時期であり、このことが成長の大きな契機となっている。また、「本気になってぶつかってくる生徒達に出会ったこと」（入職後2年）、「たった一言の言葉で生徒が傷つき、生徒自身の方向までもが大きく変わってしまったこと」（入職後3年）など、日常の生徒との接触によって生徒から多くのことを学ぶことが契機となっている。

[4] 4～10年目（中堅前期）

この時期は、教職生活にも慣れマンネリに陥りがちであるが、「最低年に1回は研究授業（特に学級指導）を行うことによって、指導法の反省改善ができ、公開授業が少しも苦にならなくなったこと」（入職後8年）の記述にみられるように、公開授業や研究授業を機会に自分のこれまでの指導法を反省し改善に役立てたり、「校内研のリーダーとして皆の力を借りて一生懸命がんばったこと」（入職後10年）など、そろそろ校内では研修のリーダー的な役割を果たすようになり、このことが大きな成長の契機となっている。しかし一方では、「荒れた学校のなかで一生懸命がんばったこと。そして、その思いを父母達が理解してくれ、さらにそれが大きな支えとなったこと」（入職後6～9年）や「生徒の問題行動が続き、連日連夜12時過ぎの帰宅が続いたが、何とか気力でそれを乗り越えたとき」（入職後10年）など生徒の問題行動への対応に腐心することが多く、それだけに問題行動を起こした生徒を無事卒業させたときの感慨もひとしおであるとの記述もみられる。なお、この時期は転勤で気分を一新する場合も多い。

[5] 11～20年目（中堅後期）

職場にあっては、「理科環境整備の役を任されて、岩石園を作ったり、流水用の山や断層面などを作ったこと」（入職後10～15年）、「新採用教師の指導助言者としての役目を果たしたとき」（入職後13年）など、重要な役割を任されたことが成長の契機となり、人間関係に悩みながらも指導力や決断力を発揮する必要にせまられる場合も多い。また、この時期は、学校外に目を向ける余裕が生まれ、「内地留学する機会を得て、特殊教育について専門的研究ができたこと」（入職後11年）や「府の長期研修を受けたことによって、理科全般についての最新の知識や技術を取り入れることができた」（入職後15年）など、校外の研修活動などにも参加し、新しい知識や技術を補充しているケースが多くみられる。

(3) その他の考察

[1] 経験年数別・性別分析

6つのカテゴリーに分類された回答を、経験年数別、男女別にその比率の推移をみたものが図2である。まず、経験年数別の推移をみれば、当然のことながら経験年数の少ない

教師は、教職生活が短いだけに「①大学時代の経験」に関する記述の比率が高く、経験を経るにつれて「⑤職務上の役割の変化等」の比率が徐々に上昇してくる。一方、男女別では、さほど顕著な差異はみられないが、女性教師は男性教師に比べて「結婚して子供を育て、初めて親の気持ちが理解できるようになった」(入職後4年)など「⑥個人および家庭生活」の比重が高く、逆に「②教育実践上の経験」がやや低くなっている。

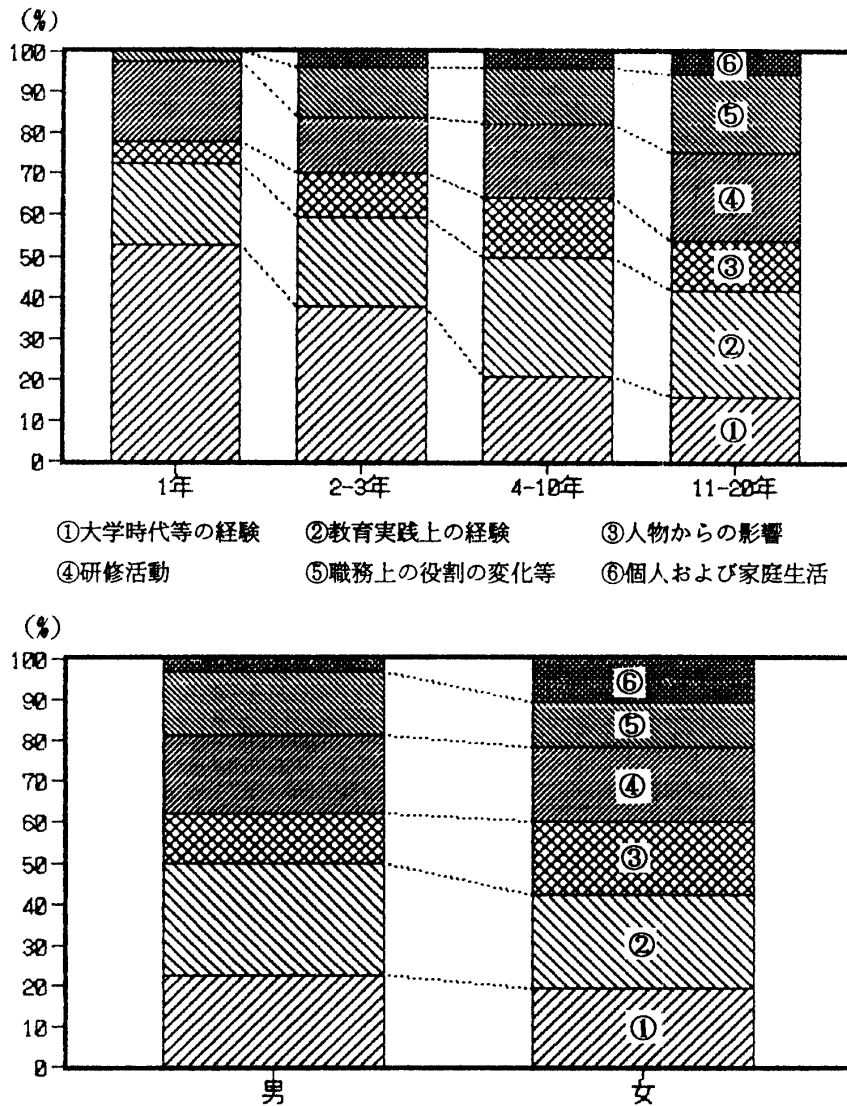


図2 カテゴリーの経験年数別・性別比率

[2] カテゴリーの経年的変化

さて、ここでは教師が段階的に4つのライフ・ステージを経るにしたがってカテゴリーの内容がどのように変化するかを、時系列的にたどってみることにする。これらの関係をみたものが図3であって、横軸に回答数、縦軸に4段階に区分されたライフ・ステージを示している。この図において特異な傾向は、5つのカテゴリーの中で「人物(指導者、

先輩等)からの影響」のみが、他の4つとは逆に年代を追うごとにその回答数が減少している点である。このことは、多くの先行研究が明らかにしているように、新任期(特に1年目)に先輩や同僚から受ける影響が極めて高く、最初に赴任した学校の先輩や同僚の対応や学校全体の雰囲気、その後の成長を左右するといっても過言ではないのである。

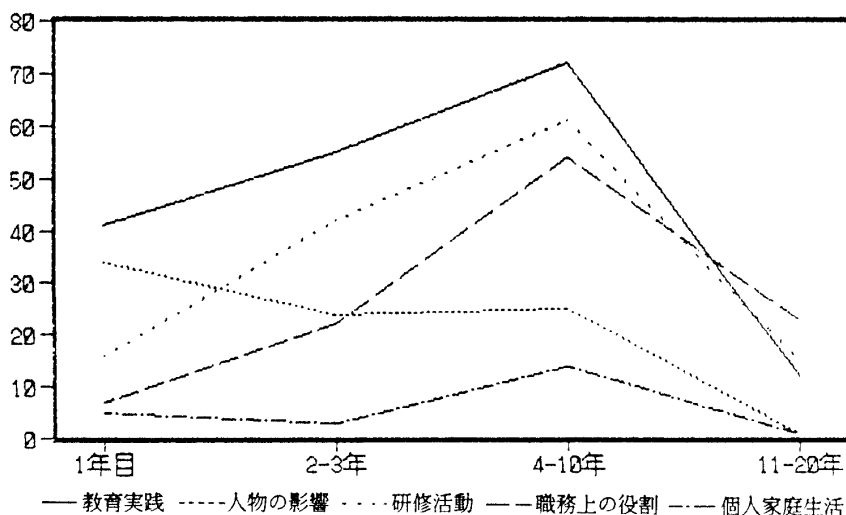


図3 カテゴリーの経年別推移

[3] 重要度別分析

調査では、3つの自由記述欄を設けており、重要と思われる順に記述する方法を用いた。そして、付表1の右欄に示すように、重要度1位を3点、2位を2点、3位を1点として重み付け得点を算出し、得点の高い順に順位をつけた。これを付表1の左欄に示す順位(回答数の多い順)と比較したが、「⑤(a)重要な役割の委譲」が5位から7位(重要度順)へ変化した程度で顕著な差異はみられなかった。このことから、今回の調査結果においては、カテゴリー別回答数の順位が、成長の契機としての重要度の順位にほぼ対応しているものと考えられる。

5 おわりに

教師が教職生涯を通じて成長を遂げる際の契機、およびその経年的変化にみられる特徴について、これまでの考察を通じて得られた知見を整理すれば、以下の諸点が指摘できる。

- (1) 「成長の契機となった出来事とその時期」について得られた759件の記述を分類すると、「大学時代等の経験」、「教育実践上の経験」、「人物(先輩等)からの影響」、「研修活動」、「職務上の役割の変化や転勤」、「個人および家庭生活」の6カテゴリーに分類できる。この結果を、稲垣らの先行研究⁹⁾と比較すれば、ほぼ両者のカテゴリーは重複しているものの、つぎの点に差異がみられた。すなわち、今回の調査では、「大学

時代等の経験」に関する回答が多く、これを独自のカテゴリーとしたのに対し、先行研究でみられた「自分にとって意味のある学校への赴任」、「学校外でのすぐれた人物との出会い」、「社会問題や政治情勢など」、「教育界の動向」などに関連した回答が少ないことから、これらをカテゴリーとして設定するまでには至らなかった。このことは、先行研究が戦前・戦時下・敗戦直後などに比重が置かれているなど、時代的社会的背景の差異に加えて、調査対象者の経験年数の長短（本調査は経験年数20年までを対象）に起因するものと考えられる。

(2)この6カテゴリーの中で最も回答数が多かったのは、「日常の生徒との接触」、「問題生徒への対応」、「部（クラブ）活動の指導」などに代表される「教育実践上の経験」（203件）であり、つぎに「大学時代等の経験」、「研修活動」の順になっている。なお、上述の先行研究では、回答数の多い順に、「学校内での研究活動」、「学校内でのすぐれた先輩や指導者との出会い」、「職務上の役割の変化」と続いており、本調査で1位を占めた「教育実践上の経験」が4位に位置している。両結果を比較すれば、本調査においては教師自身の経験が強調されているのに対し、先行研究では先輩や指導者との出会いとか職務上の役割の変化など、どちらかといえば外在的な要因の占める比重が高い。これらの差異がなぜ生じるかについては明確な根拠に乏しく、今後さらに掘り下げて検討したい。

(3)さらに6カテゴリーごとの内容についてそれぞれ最も多いのは、「大学時代等の経験」では部（クラブ）活動、「教育実践上の経験」では日常の生徒との接触、「人物（先輩等）からの影響」では先輩教師からの助言や励まし、「研修活動」では校内を中心とした研修活動、「職務上の役割の変化や転勤」では重要な役割の委譲、「個人および家庭生活」では子女の誕生であった。なお、最後の「個人および家庭生活」に関する回答（記述）が予想外に少なく、質問紙や面接によってどこまで教師個々人のプライベートな側面に踏み込むことができるのか、この点に疑問が残る。このような調査の技法上の問題点については、繰り返して検討を加え再吟味する必要がある。

(4)一方、教職生活におけるライフ・ステージを、新任初期（1年目）、新任後期（2～3年目）、中堅初期（4～10年目）、中堅後期（11～20年目）に区分するならば、それぞれのステージで比率の高い項目は、新任初期では先輩からの助言や励まし、新任後期と中堅初期では校内中心の研修活動、中堅後期では重要な役割の委譲であった。これらの項目は、教師の成長を促進するための大きな契機となるだけに、教職生涯を通じて力量形成を図る上で、特に重視すべきライフ・サイクル上の指標となるものである。

注および引用文献

- 1) 小山悦司, 「教師のプロフェッショナル・グロースに関する研究－教師の自己教育力をめぐる一考察－」, 『岡山理科大学紀要』, 第23号, 1988, pp.115～132。
- 2) Brottman, M. A., “Systematizing Studies in Teacher Education” , *JTE*, vol. 22, no. 2, 1971, p. 142.
- 3) 小山悦司, 「教師のプロフェッショナル・グロースに関する研究－教師の成長を規定する諸要因をめぐって－」, 『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』, 第7巻, 1981, p.57。
- 4) ここで用いたスキルは, テクニカル・スキル, ヒューマン・スキル, コンセプチュアル・スキルを包括している。
- 5) Lions, G. and McCearry, “Careers in Teaching” in Hoyle and Megarry, *World Yearbook of Education 1980 : Professional Development of Teachers*, Kogan Page, 1980, pp. 98～111.
- 6) 小山悦司, 「教師のプロフェッショナル・グロースに関する研究(Ⅱ)」, 『日本教育経営学会紀要』, 第23号, 1981, p .47。
- 7) その成果は, 稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編, 『教師のライフコース－昭和史を教師として生きて－』, 東京大学出版会, 1988, にまとめられている。今回の調査の実施・分析等においては, この研究から多くの示唆を得た。
- 8) 木岡一明・榊原禎宏, 「教師の自己認識から見た職能成長過程と成長促進要因－国立教員養成系大学卒業教員の事例をもとにして－」, 『日本教育経営学会紀要』, 第23号, 1988, pp. 62～74。
- 9) 成長の契機を14カテゴリーに分類している。稲垣・寺崎・松平編, 前掲書, pp. 88～81。

Survey on the Self-Educability of Teachers

— Life-Historical Analysis of the Turning-Point of Teachers —

Etsuji KOYAMA* Masaharu KOHNO** Yoshihiko MURASHIMA*

Masahiko SOGA** Junko SENOO***

Faculty of liberal Arts and Science**College of Science**Okayama University of Science*****Department of Staff-training**Kake Educational Institution**1-1 Ridaicho, Okayama 700 Japan*

(Received September 30, 1989)

The purpose of this survey is to clarify the mechanism of teacher's self-educability, especially we focused on the turning-points of growing process. Because we think these turning-points could be one of the key concepts to establish the support plans for teacher's self-educability.

In this survey, we tried to collect the date by using the methods of questionnaire and interview survey. The questionnaire survey was designed to get many descriptions about the turning-points on their life-history. Out of 1302 registered teachers of all graduate of our university, in December 1988, 372 teachers responded to this survey.

The responses to the questionnaire were analysed, and several findings were obtained as follows :

(1) Many descriptions (759 items) were categorized to six groups. They were "experiences during university life", "experiences of educational practice", "influences from significant others", "activities of in-service teacher education", "taking new position or changing school", "private and family life".

(2) In these six groups, "experiences of educational practice" is the top of ratio (203 items), and next is "experiences during university life" (167items) .

(3) On the teacher's four life-stages, *i. e.* i) first-year period (1 year), ii) new appointee period (2~3 year), iii) the first period of middle (4~10year), iv) the latter period of middle (11~20year), the most affective turning-points are "advices or encouragements from elder teacher (1 year)", "school-based in-service education (2~10year)", and "transfer to important position (11~20year)" .

付表1 集計表

	回答数	順位	I 時期					II 経験年数					III 性別		IV 重要度				
			大学	1年目	2~3	4~10	11~20	無答	1年目	2~3	4~10	11~20	男	女	1位	2位	3位	W得点	W順位
①大学時代等の経験																			
(a)部(クラブ)活動	47	(3)	47					9	9	18	11	45	2	24	16	7	111	(3)	
(b)教育実習	21		21					3	7	8	3	16	5	16	4	1	57	(10)	
(c)ゼミでの卒業研究	16		16					1	2	7	6	15	1	8	5	3	37		
(d)友人との出会い	13		13					2	2	8	1	11	2	10	1	2	34		
(e)大学以前の経験	11		11					1	1	6	3	10	1	8	3	0	30		
(f)恩師との出会い	8		8					0	1	4	3	6	2	5	3	0	21		
(g)アルバイト	8		8					0	2	4	2	8	0	1	5	2	15		
(h)教員採用試験勉強	7		7					0	1	5	1	6	1	4	3	0	18		
(i)親からの自立	6		6					1	0	2	3	5	1	5	1	0	17		
(j)ボランティア活動	3		3					0	0	2	1	3	0	3	0	0	9		
(k)その他	27	(9)	27					2	3	11	11	21	6	16	5	6	64	(8)	
小計	167		167					19	28	75	45	146	21	100	46	21	413		
②教育実践上の経験																			
(a)日常の生徒との接触	41	(4)		10	12	10	1	8	0	3	23	15	36	5	21	11	9	94	(4)
(b)問題生徒への対応	39	(6)		8	8	18	3	2	2	2	21	14	35	4	16	17	6	88	(5)
(c)部(クラブ)活動の指導	27	(8)		2	8	12	3	2	3	1	8	15	27	0	2	20	5	51	
(d)非常勤(臨採)時代	23			9	8	4	0	2	1	6	13	3	17	6	15	6	2	59	(9)
(e)学習指導上の経験	14			3	1	8	1	1	0	0	5	5	9	1	3	5	2	21	
(f)卒業生を送り出して	10			2	2	4	0	2	0	1	5	4	8	2	5	2	3	22	
(g)特殊教育での経験	10			2	2	4	0	2	0	1	5	4	8	2	5	2	3	22	
(h)進路指導を通じて	6			0	3	2	1	0	0	0	3	3	6	0	4	2	0	16	
(i)同和教育での経験	5			1	2	2	0	0	0	1	3	1	5	0	2	2	0	7	
(j)学校行事を通じて	3			0	1	2	0	0	0	0	3	0	3	0	1	2	0	7	
(k)その他の経験	25	(10)		6	5	7	1	6	1	1	16	7	22	3	12	7	6	56	
小計	203			41	55	72	12	23	7	16	106	74	178	25	87	81	35	458	
③人物(指導者、先輩等)からの影響																			
(a)先輩教師の助言励まし	50	(2)		23	11	8	1	7	1	5	24	20	41	9	33	10	7	126	(2)
(b)職場の人間関係	25	(10)		9	5	8	0	3	1	2	15	7	21	4	11	6	8	53	
(c)同僚の影響	14			2	5	4	0	3	0	1	7	6	9	5	6	3	5	29	
(d)学校での出会い	7			0	1	5	0	1	0	0	5	2	5	2	2	3	2	14	
(e)その他	2			0	2	0	0	0	0	0	2	0	2	0	1	1	0	5	
小計	98			34	24	25	1	14	2	8	53	35	78	20	53	23	22	227	
④研修活動																			
(a)研修活動(校内中心)	68	(1)		7	23	28	6	4	4	5	37	22	58	10	32	23	13	155	(1)
(b)研修活動(校外中心)	36	(7)		5	9	12	7	3	2	1	12	21	32	4	12	12	12	72	(6)
(c)研究論文・研究発表	22	(8)		2	8	12	1	2	1	2	12	7	19	3	6	11	5	45	
(d)個人学習によって	15			2	8	6	1	1	0	2	4	9	12	3	6	6	3	33	
(e)その他の活動	3			0	1	3	0	0	0	0	1	2	3	0	2	0	1	7	
小計	144			16	55	61	15	10	7	10	66	61	124	20	58	52	34	212	
⑤職務上の役割の変化や転動																			
(a)重要な役割を任されて	40	(5)		4	4	16	11	5	1	1	12	26	38	2	13	16	11	66	(7)
(b)主任(主事等)を担当	24			0	2	13	7	2	0	1	8	15	23	1	8	11	5	51	
(c)転動によって	22			0	6	14	1	1	0	2	14	6	22	0	5	10	7	452	
(d)学級担任となつて	21			3	10	5	3	0	0	13	13	4	13	8	9	7	5	46	
(e)その他	12			0	0	6	1	0	0	2	2	4	6	1	8	11	5	51	
小計	114			7	22	64	23	8	1	49	49	55	124	12	36	45	32	230	
⑥個人および家庭生活																			
(a)子女の誕生	9			0	0	8	0	1	0	0	3	6	4	5	1	3	5	14	
(b)結婚	5			1	1	2	0	1	0	2	2	1	2	3	1	3	1	10	
(c)社会人時代の経験	5			2	1	0	0	2	0	0	3	2	5	0	2	1	2	10	
(d)その他	14			2	1	4	1	6	0	1	6	7	10	43	5	5	4	29	
小計	33			5	3	14	1	10	0	3	14	16	21	12	9	12	12	63	
総計	759			167	103	146	226	52	65	36	74	363	286	649	110	343	260	156	1705

(注) W得点、W順位のWは重み付けを意味し、W得点は1位を3点、2位を2点、3位を1点として算出した。

付表2 成長の契機についての記述例

	計(回答数)	記述例
①大学時代等の経験		
(a)部(クラブ)活動	47	<ul style="list-style-type: none"> ・サークル活動を通じて人間関係が広がり、特に人の輪(和)の大切さを強く感じると共に生涯の友を得たこと(大学1～4年次) ・少林寺拳法を4年間やり通し、根気強さや精神力を鍛練し、集団の中で自他の立場を考え調整する能力を養ったこと(大学1～4年次) ・クラブ活動(児童文化部)を通じて、児童・生徒とのふれあいの中で、現在の生徒理解の基礎を養ったこと(大学1～4年次) ・有志を募ってサークル活動を始めリーダーとして運営や活動に力を注ぎ、集団をまとめる難しさを学んだこと(大学2年次) ・大学時代のクラブ活動で、責任のある立場に立ち、人間関係に悩みながら多くの失敗やいくつかの成果が達成された時(大学2～3年次) ・ラグビー同好会に入り、その中で情熱と挫折と自分の限界を知り、人間としてひと回り大きくなった(大学2～4年次)
(b)教育実習	21	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習で初めて教壇に立ち、本物の生徒達に接し徐々に意思の疎通を図ることができ、教職に就きたいという気持ちが一層と向上した(大学4年次) ・教育実習をしたとき、実習担当教師から激励されながら一生懸命授業の準備をし、クラスの生徒達とのかかわりの中でいろいろな経験をしたこと(大学4年次)
(c)ゼミでの卒業研究	16	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究で幼児行動をテーマに選び、子ども達の成長を直接観察しているうちに保母さん達の苦勞に気づいてから(大学4年次) ・研究室で研究のいろはを学び、討論会で鍛えられながら命がけて研究にトライしたこと(大学4年次)
(d)友人との出会い	13	<ul style="list-style-type: none"> ・大学時代にさまざまな友人にめぐり逢い、真面目だけがとりえの自分が成長できたと思う(大学1～4年次) ・新しい友人との出会いから自分一人では得られない「人間の良さ」を感じた(大学3～4年次)
(e)大学以前の経験	11	<ul style="list-style-type: none"> ・大学入学前、東京で独り新聞配達をしながら、専門学校へ通っていたこと(大学入学前) ・小・中・高と部活動(部長など)を通じ、組織やその運営の仕方などを学んだこと(小～高校)
(f)恩師との出会い	8	<ul style="list-style-type: none"> ・我が師と尊敬する恩師に出会い「教育は自己の追体験だ」と言われたときの感動(大学3年次)
(g)アルバイト	8	<ul style="list-style-type: none"> ・アルバイトをして社会の厳しさをひしひしと実感し、自分の適性を教えられたこと(大学2年次)
(h)教員採用試験勉強	7	<ul style="list-style-type: none"> ・教員採用試験のため、昼夜関係なく必死でがんばったこと(卒業後2年目)
(i)親からの自立	6	<ul style="list-style-type: none"> ・親元を離れ下宿生活をする中で、いろいろな人と知り合いになり、自立できる

(j) ボランティア活動 (k) その他	3 27	自信がついたこと (大学1年次) ・ボランティア活動を通して障害者に接し多くのことを学んだ (大学3～4年次) ・大学寮での先輩－後輩の人間関係や寮生の連帯感など、数多くの体験を通じて学んだこと (大学1年次) ・ラジオで「シュタイナー教育」についての放送を聞いたことがきっかけで、関係の本を読みあさり、強い感化を受けたこと (大学1年次) ・ついに留年し、父親が岡山に来て説教され、気持ちを切り換えて勉学を続けたこと (大学3年次)
②教育実践上の経験 (a) 日常の生徒との接触 (b) 問題生徒への対応	41 39	・初めて教壇に立ち、子ども達一人ひとりの顔さえ見る余裕がなかった時、子ども達に「先生」と呼ばれて励まされたこと (入職後1年) ・本気になってぶつかってくる生徒達に出会ったこと (入職後2年) ・定時制 (夜間部) の高校生とのふれ合いから、教育とは、教育の中の数学とは何かを改めて考えさせられた (入職後3年) ・全寮制の学校で舎監として生徒と寝食を共にし、授業中では見られない生徒の意外な側面を見たこと (入職後3年) ・たった一言の言葉で生徒が傷ついてしまい、生徒自身の方向までもが大きく変わってしまったこと (入職後3年) ・生徒指導を通じて、生徒や父母からどんな批判を受けても、裏切られても、どこまでも嘘をつかれても、「生徒を信じなければいけない」と自分に言い聞かせながら接することができたこと (入職後8年) ・あらゆる派閥から離れ、生徒を中心に考えることができるようになり、「教師もたかが一個の人間」と考えるようになったら、生徒がついてくるようになった (入職後12年) ・初めて担任を持った時、万引きをした生徒が出てしまい、どう指導すべきか自分なりに必死に悩んだこと (入職後1年) ・学校が生徒の放火で全焼し、その生徒の担任であったこと (入職後5年) ・同和地区をかかえたA中学で地域の生徒B君を2年3年と担任し、何とかクラスの中に入れるために、クラスの仲間と共に努力をし、無事卒業させたこと (入職後5年) ・荒れた学校の中で一生懸命がんばったこと。そして、その思いを父母達が理解してくれ、さらにそれが大きな支えになったこと (入職後6～9年) ・無断外泊した女生徒の親と4時間近く話し合ったすえ、自分と父親との教育観のはなはだしいギャップに気づき、新たな世界を見た思いをしたこと (入職後8年) ・荒れた学校の中で何かと逃げ腰の教師が多い中、自ら体を張って教育活動に励

		<p>んでいたこと（入職後8～10年）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の問題行動が続き、連日連夜12時過ぎの帰宅が続いたが、何とか気力でそれを乗り越えた時（入職後10年） ・授業をボイコットした生徒達と、とことん話し合って落ち着かせ、生徒と教師が協力できる学校の雰囲気を作ったこと（入職後10年）
(c)部活動・クラブ活動の指導	27	<ul style="list-style-type: none"> ・ようやく新採となって吹奏学部を担当し、今年3年目でやっと部員もそろい、生徒達に自分の方針が伝わり、全体がまとまってきた。そして、目標のコンクール地区予選でついに金賞を受賞した（入職後3年） ・大学時代のサークル活動での経験を活かし、学級歌や音楽会の出し物を生徒達と一緒に作ったこと（入職後3年） ・クラブ活動（野球）に力を注ぎ、生徒と共に毎日汗を流してがんばり続けた結果、共感しあってきっちりまとまったチーム作りに成功したこと（入職後8年）
(d)非常勤(臨採)時代の経験	23	<ul style="list-style-type: none"> ・社会に出て早々、臨時とは言え、学校という職場で多くの先生方とおつきあいが始まった時、「採用試験がんばれ」と口々に声をかけていただいたこと（入職後1年） ・臨採から本採になるために、勤務をしながらなお通信教育を受け、さらにピアノのレッスンまでしていたこと（入職後1～2年） ・非常勤で勤務しながら採用試験に何度も落ち、企業への就職も一度は考えるなど、自分自身との闘いを経た結果、4回目でやっと合格したこと（入職後1～4年）
(e)学習指導上の経験	14	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科ともよくできる生徒から、「私は自然との触れ合いが少なかったので、先生の授業がわかりません」と言われて、言葉では表すことのできない大変なショックを受けたこと（入職後6年） ・理系進学生徒の指導のために教材研究や補習に意欲を燃やし、毎朝のテストの準備に没頭したこと（入職後7～8年）
(f)卒業生を送り出した時	10	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての卒業生を送り出した日、生徒や親から感謝されたこと（入職後4年）
(g)特殊教育での経験	10	<ul style="list-style-type: none"> ・重度心身障害児の世話をし、大便や生理の処理などを経験したことによって、普通校での子どもの心身を見る視点が根底から変わったこと（入職後3年）
(h)進路指導を通じて	6	<ul style="list-style-type: none"> ・進路指導を任せられ生徒一人ひとりの進路面を懸命に考えたとき（入職後6年）
(i)同和教育での経験	5	<ul style="list-style-type: none"> ・同和教育にかかわり、「人が人として幸せに生きていく」ということを自問自答し、「教育とは何なのか」「今まさに何をすべきか」などをしっかり考え、今まで管理的であった自分から脱皮でき、ゆとりを持って生徒に対応できるようになったこと（入職後5～7年）
(j)学校行事を通じて	3	<ul style="list-style-type: none"> ・文化祭の作業（合唱、壁新聞、壁画、学級展示）を生徒と一緒にやって共に苦勞しながらもやり遂げたこと（入職後4年）
(k)その他の経験	25	<ul style="list-style-type: none"> ・新任1年目、今まで常識として持っていたもののほとんどの部分をひっくり返され、世の中にはこんな考え方もあり、これが今の学校だということを知らさ

		<p>れた（入職後1年）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域リーグ（バレーボール）に参加し、地域の青年達と接することによって、今までにない学校外から見た世界、学校観、教師像を知ることができ、逆に地域へアピールすることもでき連携がとれるようになった（入職後1年） ・生徒の自殺に直面したとき、自分自身の存在感のなさにやりきれず、一度は退職を考えたが、この罪を背負ったまま逃げてはいけないと思い、もう一度やり直そうと決意した時（入職後1年） ・入職後2年目、毎朝欠かさず裏門に立ち生徒に朝のあいさつをかわし続けた時（入職後2年） ・親や同僚あるいは生徒から学級通信を非常にほめられ、それが自信とやる気につながった（入職後2年）
③学校内外での人物（指導者、先輩等）との出会い	50	<ul style="list-style-type: none"> ・入職後1ヶ月もたないうちに、校長から「責任」の重みについて一喝を受けた時（入職後1年） ・就職最初の年、初めての担任を持つなどして多くの問題を抱え、肉体的・精神的に疲れ果てる毎日だったが、先輩の先生方から「がんばれよ」と常に暖かい言葉をいただき激励された時（入職後1年） ・先輩教師の授業を空き時間には必ず参観させてもらい、自分自身に役立てたこと（入職後1年） ・専門的な知識にずば抜けている教師に出会い、その知識を学んだり盗みとることで自分の成長に結びつけた（入職後2～3年） ・学年教師集団の中で、良き先輩とめぐり会え、学習指導や生徒指導についてアドバイスを受けて、新しい知識を得ることができたこと（入職後3年） ・年輩の教師によく飲み連れてってもらい、本音であれこれと教育（特に指導法）について助言を受けたこと（入職後4～5年）
(a)先輩教師からの助言や励まし		
(b)職場の人間関係	25	<ul style="list-style-type: none"> ・就職してから、職員室内の雰囲気などから、教師という職業も生きていくための手段でしかないの难道うかと感じ、相当なショックを受けたこと（入職後1年） ・一部の教師との人間関係をわずらわしく思い、辞職の意志を固めたとき、多くの教師から慰留され励まされたこと（入職後2年） ・教師間がバラバラであり、何とかしてまとめようと悩み努力したこと（入職後6年） ・管理職と大喧嘩をし、それに対抗すべくあらゆる法律書を読んで専門性を身につけたこと（入職後7年）
(c)同僚の影響	14	<ul style="list-style-type: none"> ・すばらしいパートナーとの学年団的活動ができ、どんなことにも一生懸命になって取り組めたとき、相手も共に喜んでくれ、変容したと言われたこと（入職後

		2年)
(d)学校外での出会い	7	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日学級通信を出している同僚がいて、自分も毎日とはいかないが、よく通信を出すようになったこと(入職後14年) ・仕事に疲れを感じていたある日、学生時代の先輩と一緒に飲むことになり、心底から温かいアドバイスを受けて、いろいろな考え方があることを学んだとき(入職後8年)
(e)その他の出会い	2	
④学校内外での研修活動		
(a)研修活動(校内中心)	68	<ul style="list-style-type: none"> ・講師として自分なりに初めて研究授業をした時、多くの先生方に異なった角度から批評していただいたこと(入職後1年) ・県指定の焦点授業を公開し、改めて「授業」という50分間の流れの重要さや生徒の思考の変容について考え始めたこと(入職後2年) ・新卒3～4年間、研究指定校であり、数学や学級指導の研究授業を数多く行い、他の先生方に遅くまで指導をしていただいた(入職後3～4年) ・文部省の研究指定校として公開授業を行うことになったため、2年間に渡って指導主事等と綿密な打ち合わせや研究を続けた(入職後4～5年) ・文部省の研究指定校になり、1年間苦勞したこと(自分だけでなく教師集団が一つになって研究に取り組んだこと)(入職後5年) ・公開授業や研究授業を年2回は行うので、そのたびに一生懸命準備し、ある程度認められるようになったこと(研究協議会誌に掲載された)(入職後7年) ・最低年に1回は研究授業(特に学級指導)を行うことによって指導法の反省改善ができ、公開授業が少しも苦にならなくなったこと(入職後8年)
(b)研修活動(校外中心)	36	<ul style="list-style-type: none"> ・広大教育学部の教授を中心として、1カ月に1度グループ研修を行い、数学(中学校)の学習を続けたこと(入職後3～5年) ・幼い頃から好きだった昆虫や動物についての研究サークル活動を始めることができたこと(入職後2年) ・27歳研修を修了し、特に道德教育で多くを学び、現在は文部省指定校(道德)で研究等に励んでいる(入職後5年) ・カウンセリングに参加して、人間の「心」がゴムまりのようなものであることがわかり、「心」の訓練をしておくことが、生徒と対する時に重要であることがわかった(対教師間でも対保護者間でも同様)(入職後5～7年) ・府の長期研修を受けたことによって、理科全般についての最新の知識や技術を取り入れることができた(入職後15年) ・文部省長期海外派遣団の一員として諸外国の学校を訪問したこと(入職後15年)
(c)研究論文・研究発表等	22	<ul style="list-style-type: none"> ・研究収録に教育論文を掲載するために毎晩ほとんど徹夜でがんばったこと(入職後6年)

<p>(d)個人学習によって</p> <p>(e)その他の活動</p>	<p>15</p> <p>3</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省指定「豊かな心を育てる施策推進モデル都市研究発表大会」(生徒指導)において昼夜を問わず研究し発表したこと(入職後7年) ・大学卒業後すぐに教職に就いたが、教科に対する専門的知識が不足していることに焦り、大学受験のための予備校や通信教育(慶応大, 仏教大)で学習した(入職後1~2年) ・自己変革という自分自身の精神内面の営みに大きな関心を持ち、哲学や仏教等の書物を暇をみつけては読みふけたこと(入職後4~10年) ・公開授業や校務分掌上で研究的な仕事をする際、教育専門書の良いものに出会ったこと(入職後5年)
<p>⑤職務上の役割の変化や転勤</p> <p>(a)重要な役割を任された時</p> <p>(b)主任(主事等)を担当して</p> <p>(c)転勤によって</p>	<p>40</p> <p>24</p> <p>22</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・新設校に赴任して、いきなり責任のある重要な仕事を任せられ、子ども達とともにゼロから学校づくりを始めたこと(入職後3年) ・生徒会の顧問となり、学校全体を動かすために、種々な準備等を執行部と生徒で行っていったこと(入職後3~4年) ・入試を新方法で処理するにあたり、その中心的な役割をまかされたこと(入職後4年) ・教科書採択委員として府代表に委任されたとき(入職後9年) ・理科環境整備の役を任されて、岩石園を作ったり、流水用の山や断層面などを作ったこと(入職後10~15年) ・新採用教諭の指導助言者としての役目を果たしたとき(入職後13年) ・新卒4年目にして、生徒指導主任を命ぜられ、校内暴力の毎日、死ぬ思いでがんばり通し、生徒指導についていろいろと助言を受け学習したこと(入職後4~7年) ・研究主任として、校内の主題研究をとりまとめ、月1回の研究授業(全校研)、また月2回ほどの部会研をもち、すべてに参加して研究の方向づけや研究内容など話し合ったこと(入職後8年) ・教務主任となり校内における教科の見直しや時間割り作成に采配をふるったこと(入職後10年) ・学年主任となり学年団のまとめ役をするようになって、学校行事の計画や教員間の意思の統一などで、人間関係の難しさについて苦労したこと(入職後11年) ・初めて学年主任(生徒数約600名の中学校)となって、リーダーシップの力量が必要であることを痛感したとき(入職後14年) ・廃校を目前にひかえた過疎地の高校において、生徒のやる気を何に対して出させたら良いかをいつも考えていたこと(入職後2年) ・赴任した学校が研修の先進校で、職場の同僚達が研究熱心で教案審議など夜遅くまで互いに討議したとき(入職後6年)

(d)学級担任となって	21	<ul style="list-style-type: none"> ・転勤により心機一転すぐに公開授業を行ったこと（入職後9年） ・2年目に最初の担任を持ち，登校拒否などの生徒指導に振り回されたこと（入職後2年） ・初めて担任し，生徒とうまく行かず非常に苦しんだことが踏み台になったような気がします。そのかわり，今でも夢の中でうなされますが…（入職後3年）
(e)その他	12	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習で指導する立場におかれた時，実習生の姿を通して日ごろの自分を反省できたこと（入職後6年）
⑥個人および家庭生活		
(a)子女の誕生	9	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚し子供を育て，初めて親の気持ちが理解できるようになった（入職後4年） ・我が子が生まれ，他人の子供を冷静かつ暖かく見守ることができるようになった（入職後7年）
(b)結婚	5	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚により，幅広い視野を身につけることができ，精神面でも落ち着きが増した（入職後4年）
(c)社会人時代の経験	5	<ul style="list-style-type: none"> ・大学を卒業し，最初に就職した会社で社会の厳しさを知った（卒業後1年）
(d)その他	14	<ul style="list-style-type: none"> ・海外に出て外国から日本をながめることによって，今までとはひと味違ったものの見方ができるようになったこと（入職後1年） ・重病を患い苦しきから逃れようと考えたが，子供という心の支えを持っていることを改めて実感し，これからの自分の姿に思いをはせたこと（入職後6年）